

令和元年度第2回屋久島世界遺産地域科学委員会 ヤクシカ・ワーキンググループ  
及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議  
議事概要

日時：令和2年2月15日(土) 14:00～17:00  
場所：宝山ホール(鹿児島県文化センター)2階 第3会議室

議事(1) ヤクシカの生息状況等について

- ・多くの地域でH29年度に一旦減少したもののH30年度に増加、R元年度に減少に転じるという分析結果となっていることについて、H29年度については死体が見え自然減もあったということである程度理由が見つくが、その後増えて減ったのかどうかは信頼幅もあるので慎重に。今後の推移を見ながら慎重に判断をするべきである。(松田委員)
- ・局所的に増えている箇所と減っている箇所があって、全体としては平成29年度と変わらないくらい増えているので、現時点での判断は難しく、今後も推移を見守るべき。(矢原座長)
- ・捕獲数が減少しているのは、捕獲効率が低下している可能性もある。(濱崎委員)
- ・西部の糞粒密度結果は、現地の印象より低い。(濱崎委員)
- ・西部を歩いてシカをカウントする調査をしているが、最近5年は減少傾向にあり、その結果は今回の糞粒調査の結果と一致している。(杉浦委員)
- ・中間林道と南部林道の間あたりの山中ではシカは増えていると感じる。希少種も影響をかなり受けてしまうので、柵の増設をご検討いただきたい。(荒田委員)
- ・捕獲圧がかからないところに高密度化したホットスポットができている可能性はある。今後、局所的なところにも注目したい。(矢原座長)
- ・罾を設置するとシカは警戒するため、くくり罾で捕獲はされにくくなっている印象を受ける。(大堀委員)
- ・現地で捕獲している方の話では、シカがかなりすれて、捕獲が困難になっているという話を度々聞く。捕獲ができず、見た目上の生息密度が減ったのではないかという印象がある。(稲留主任)
- ・伐採後の植林地がシカの採餌地となり被害拡大の可能性のあることについても留意し、森林組合や林野庁等と連携しながら被害状況を把握して対応することが望まれる。(荒田委員)
- ・環境省の糞粒調査箇所変更について、このエリアはシカの生息密度が下がり、従来シカが食べて移動していたルートが藪になったため、これまでの糞粒調査のルートが調査困難になった。藪になったところをシカは歩かないため、そこで糞塊調査をしても有用なデータが得られるとは思えない。歩きやすい調査ルートに変更して良いと考える。(矢原座長)
- ・遺伝的には、島全体が混ざっている。あえて分けようとするなら、安房、栗生、小楊子はかなり似ていて、一湊から小瀬田、宮之浦がかなり似ている。また、5千頭くらいまで減

らしても今の遺伝が減ってしまうことはないという結果が得られている。(矢原座長)

#### 議事 (2) 令和元年度及び令和2年度の取組について

##### ■シャープシューティング体制による試験捕獲及び説明会の実施について

- ・シャープシューティング体制では、資料に記されているような誘引餌摂食の数値化や射手への綿密な無線連絡など、きめ細かな指示のもと行った結果、捕獲ができています。単純にこの体制で誘引捕獲をやったら捕れるということではない点には留意が必要。(鈴木委員)
- ・指定管理鳥獣捕獲等事業であれば、従事者に対し体制や手法に関する細かな指示が可能なので、色々なところでやられている情報を基に、決めの細かな捕獲作業、指示を進めてほしい。(鈴木委員)
- ・警戒心が高くなっている個体が増えている中で、日没前後しか現れない地域もあるため、今後、夜間の銃猟も検討していく必要がある。(濱崎委員)

##### ■西部地域の目指すべき森林生態系とヤクシカ対策をテーマとした意見交換会について

- ・資料の作り方の点で、2日間にわたって議論した中身についての記載がないため、何を話し合ったか不明。意見交換会を踏まえた修正案は、出席者に対してフィードバックすべき(湯本委員)。
- ・意見交換会は実質的に価値観を問うものであり、意見を集約するには無理があった。我々は既に森林生態系管理の目標を設定したところであり、西部地域を含めこの目標の達成に向けた議論をすべきである(矢原座長)。

##### ■西部地域のヤクシカ管理実施計画(修正案)の検討について

- ・西部の取組方針については、減らすか減らさないかの二者択一ではない。知床で進められたように、まずは関係者の様々な考えを取り入れ実験的に合意形成を図っていくという進め方が良い。今後、本当に減っていくのかどうかの判断が困難な現状の中、放っておいてよいというのは研究者として無責任。(鈴木委員)
- ・知床でもかなり議論があり、不可逆的な影響があると困るということで捕獲することになった。知床では、自然植生が回復しつつある、ということで、今では捕るべきではなかったという意見はほとんど聞かれなくなっている。(松田委員)
- ・捕獲がある程度決まったところで進められてきた中で限界が見えてきていると思う。次のステージとして、捕獲されていない地域での捕獲対策など新たな取り組みを進めるのは良いことである。慎重に合意形成を図る努力をされて進めてきている。(濱崎委員)
- ・西部地域は世界遺産として海岸から頂上までの自然植生分布が見られる場所として位置づけられていて重要性がある。瀬切は、西部地域の中では植物多様性も豊かで絶滅危惧種や固有種も比較的多い。森林生態系管理目標に照らした判断として、この地域の捕獲は妥当。この地域の植生を海拔 0m から標高の高いところまでまず回復させるということが、一番優先順位の高い目標。(矢原座長)
- ・西部地域のヤクシカ管理実施計画について、モニタリングのための個体数管理区(個体数

調整区)、対照区(個体数未調整区)、隣接区(緩衝区)の捕獲試験の空間スケールが狭いため、この範囲で比較検証できるかが気になる。シカは移動するので、捕る場所と捕らない場所でメリハリが出るほど空間的に距離がある気はしない。(松田委員)

- ・瀬切での捕獲は、川原や半山の個体群にも影響する範囲と考える。その点は予測しているというのを外部向けにもオープンにして議論していった方がよい。(矢原座長)
- ・西部で捕獲するにあたっては、生息密度をどこまで下げるのか、何頭捕るのか、自然植生をどうするのか等や、瀬切だけで良いのか周辺も含めた移動まで考えて決めるのか等、目標設定の仕方は色々あるが、目標を定めて取り組むべき。(松田委員)
- ・頭数をどこまで下げるか、どのエリアをどの程度下げるか、植生がどうなるようにするという目標が今ひとつ見えない。(杉浦委員)
- ・周辺の区域まで含めて考えないと、瀬切の個体数を減らすだけでは捕獲した箇所は空白となるため、その周辺のシカの移動を誘発すると思われる。捕獲する目標によって変わってくるので、最初に何頭捕って影響を見るのか、その数を設定しないと何とも言い難い。(湯本委員)
- ・森林生態系管理目標を設定する際議論した、当時はほとんど食圧を受けていなかった南部の頭数が目安になるのではないか。また、その後捕獲により低密度化して植生回復の傾向が見られる東部の小瀬田の頭数 Km 当たり数頭レベルが目安になるとと思われる。(矢原座長)
- ・捕っても周りから補給されることを考えると、空間的スケールが出てきて、最初は仮説となるがその影響は分かると思うので、そういう意味では実験的な価値はあり得る。(湯本委員)
- ・三分割とするのは先進的で良い。やってみてどう変わっていくかを見ながら検証していくということは、これからの他の地域の林床植生の回復にもつながる。最低限生息密度をどの程度にするかについては実施しながら検討していくことで良いと思う。(荒田委員)
- ・私もスケールの問題が気になる。もし実際実施される場合はきちんと検討してほしい。カメラがグリッド状に並んでいるのは良いと思うが、捕獲の影響がどこまで及んでいるのか把握するのにこのグリッドのスケールで良いのか。屋久島の狭いスケールで考えてデザインすることを考えた方がよい。(杉浦委員)
- ・杉浦先生の指摘されたことは、この調査を進めることで見えてくる。どのくらいの密度でカメラを仕掛けるのかは重要な論点だが、このモニタリング方法により撮影頻度の濃淡をマッピングでき、捕獲によってそれがどう変わっていくかを視覚化できる。グリッド状にカメラをかけないと逆にマッピングが不正確になってしまうので注意が必要。(鈴木委員)
- ・自動撮影カメラのモニタリング手法については、岐阜大学教員がアドバイスしており、客観的なデータでの捕獲効果の検証ができる。モニタリングをしながら実施していくことが必要。(鈴木委員)

- ・瀬切大橋を渡るシカがどれくらいいるのか見たいので、参考程度でカメラの追加設置の検討をお願いしたい。(荒田委員)
- ・森林生態系管理目標が計画に落とし込まれていない。今後瀬切で捕獲したときの評価として、柵の内外でどのくらい違いがあるかが指標になるので、柵を設置して内外の比較ができるようにすることがポイント。(矢原座長)
- 高標高域に生息するヤクシカの行動圏の把握について
  - ・高標高域は、絶滅危惧種、屋久島に特徴的なシダ植物群落からすると重要性が高い。未だに劣化が進んでおり、尾根筋を移動して絶滅危惧種を食べているのでその対策が必要。(矢原座長)
  - ・メスで繁殖との関係があるのではないかと思うが、2年3年ともう少し見る必要があると思う。(荒田委員)
  - ・個体差もあるため、複数個体のデータを蓄積する方が望ましい。(濱崎委員)

#### 議事(3) 森林生態系の管理目標について

- ・報告では「回復には至っていない」とあったが、改善方向にあるのか、そうでないのかが明確でない。表現上のことかもしれないが、今後重点的に取り組むべきことが変わるほどの大きな評価であるため、この点を正確に整理するべきである。(松田委員)
- ・シカの密度を下げた効果が森林生態系管理目標の現状把握、指標、達成状況について評価できるようになってきたことは前進と思われる。(矢原座長)
- ・種数が回復している箇所はあるが、絶滅危惧種や希少種はシカに摂食されており、種数だけでなく管理目標(3) ヤクシカの嗜好性植物種の更新、(4) 絶滅のおそれのある固有植物種等の保全も併せて評価することが重要である。(矢原座長)
- ・希少種及び絶滅危惧種の保護という観点からは、現状の対策(保護区画における柵の設置数)は十分ではない。(矢原座長)